令和７年度　学校評価表

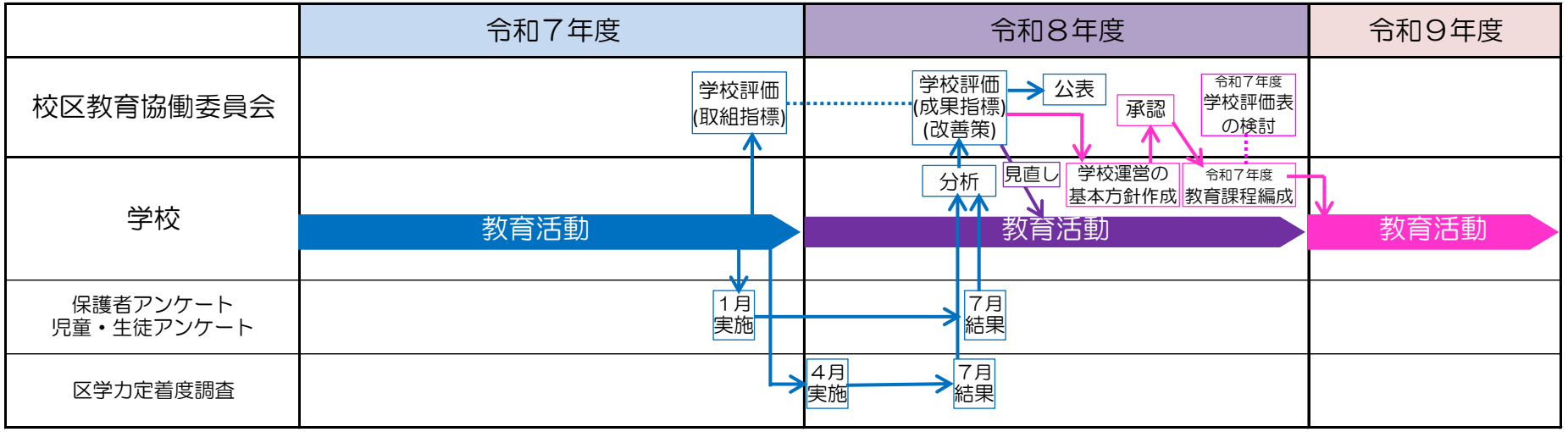
品川区立冨士見台中学校	校長	石黒　晋
冨士見台中学校校区教育協働委員会	委員長	古家　眞

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正　令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

⑴ 学力に関すること。
⑵ 人間性や社会性に関すること。
⑶ 体力・健康に関すること。
⑷ いじめ防止の取組に関すること。
⑸ 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。
学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和７年度の学校評価が令和８年度および令和９年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和７年度　学校評価　品川区立富士見台中学校

評価項目１　学力に関すること

重点目標	自己実現を可能にする生徒の育成 ■重点目標 １　学習指導力の向上 ２　家庭学習の徹底 ３　学びの場の保障

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	区学力定着度調査では、全問題において区の習熟基準を達成する。	区の習熟基準で、全ての値においてほぼ達成できた。英語科、数学科、国語科は目標値を上回っている。理科、社会科は、目標値と同等である。理科に関しては学年によって達成度に差が出ている。現状の学習への取組を維持し、より学力を伸ばしていくことが必要である。	B	生徒の実態に応じて指導の工夫をしていく必要がある。学習習慣がない生徒が多い、これをどうやって身につけさせるかを考えたい。ICTについてはミライシードの活用は7年のみなので他でも活用した方がよい。誰一人取り残さない家庭学習機会の提供のためには、ICTなどで課題を配信するだけでは不十分である。生徒が学校にいる際に、教員が当該生徒が一人でも課題に取り組める知識をつけられるよう見とる必要がある。そのような機会充実と、教員の負担の二つを天秤にかけて取り組んで行く必要がある。
	①　各種学力調査・定期考査・日々の学習状況を分析し、課題を明確にして、「学力向上に向けた取組」と題した資料にまとめる。その後、進路学習部会において、指導方法や内容案を検討し、学習指導改善を図っていく。	各教科分析をし、改善を図る指導をした。達成度を項目ごとに確認し、各学年の学習計画について同教科の教員と議論し、授業に活動として取り入れた。「読むこと」で区平均正答率を0.7%下回っているため、帯活動でLeadingに特化したドリルを用い、指導改善の手立てとした。「学力向上に向けた取り組み」に科目、学年ごとに向上させるべき能力をまとめた。それぞれの科目において能力向上に必要な指導方法を考察し、改善した。	B	
	②　家庭学習や自学自習の習慣を定着させるため、ICT機器や自学ノート等の活用を通して、充実を図っていく。	ミライシードを活用してふり返りをさせる。市民科や教科など、デジタル教科書やロイロノートを活用し、学習する機会を作っている。ロイロノートでWritingを都度添削・指導した。ミライシードから課題を配信し、家庭学習時間を連絡帳に記述させ、家庭学習及び自学自習の習慣の定着をすすめた。	B	
②	全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の授業の工夫に関する設問において、全国平均を上回る。	市民科や教科など、デジタル教科書やロイロノートを活用し、学習する機会を作っている。全国平均より低い値が目立った。特に、自分自身について肯定的にとらえられていない。授業の工夫に関する設問の結果を確認できていない。	B	今後も授業観察を通して、反省→改善を行っていく。校内研修会での意見交換による学び合いはおおむね達成の状況なので、教師道場で学んだ内容を積極的に伝えるよう努める。校内研修会については、各テーマごとに講師を呼ぶか、１年間で同じテーマで同じ単元をグループ別に授業を作り上げるなどのタスク型の研修のほうが、より有効となると感じた。今後も生徒に合った授業づくりをするために意見交換を行っていきたい。普段の授業の延長上で研修を行い普段の授業準備の時間をしっかり確保することで授業改善を目指す。様々な教員と意見交換を行い、新たな視点で客観的に自分の授業に活かしていく。学力調査の授業の工夫に関する質問等、項目ごとにすぐに確認できる環境があると、より授業改善への意識が高まると考える。
	①　校内研修会において、教員同士が研修し合う場を設定し、授業力向上に向けて意見交換を行っていく。	主体的で対話的な学習活動に関する校内研修を行い、お互いに授業観察をし、意見交換を行った。研修会を通じて他教科の取り組みを知る機会になった。授業後に振り返りを行い共通の理解や授業を高めることができ様々な知識が身についた	B	
	②　教員の研究授業を通して、主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業を行い、意見交換や助言を生かした授業改善を行っていく。	・研修会を通じて授業改善を図った。英語の少人数では、各教員が工夫して取り組んだワークシートやアクティビティを共有し、他学年でもアレンジして活用できるように、コミュニケーションを意識して情報共有をするようにしていた。研究授業を取り組み、主体的で対話的な学習活動に関する意見交換の内容を自身の授業に活かすことができた。	B	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立富士見台中学校

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標	○自己実現を可能にする生徒の育成 ■重点目標 １　信頼関係の構築 ２　体験的な活動を取り入れた多様な活動形態の充実 ３　より深い生徒理解の徹底

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	学校行事等、学校教育活動にウェルビーイングな取組を取り入れ、全校生徒の意識を高める。	運動会、富士見祭、日直の目標等にウェルビーイングに関する目標設定場面を設け意識を高める取組ができている。またウェルビーイング委員会等の組織が積極的に動き、地域との連携ができた。富士見祭では自分たちで考えウェルビーイングを意識した製作活動が部活動で出来ていた。教員のみならず、生徒自身もウェルビーイングという言葉を意識した活動を行うことができた。自己存在感の感受できるような配慮を特にできていたように感じる。	A	家庭との共通理解を図るのは難しいこともある。配慮を要する生徒への対応、指導方法を特別支援委員会の先生方に相談し連携しながら行っていく。もう少し研修をし、相談にのれるように専門性を高めていく。全生徒がウェルビーイングな学校生活を送れるよう、今後も教員間の情報共有、連絡、相談を密に行っていく。ウェルビーイングな取り組みについて知識を深めていく。ハーツと情報交換会ができたので継続する。
	①「富士見台中の生徒指導マニュアル」に基づいて、教職員が共通理解し、全教職員で生徒指導にあたっていく。	教員のみならず、生徒自身もウェルビーイングという言葉を意識した活動を行うことができた。自己存在感の感受できるような配慮をとくにできていたように感じる。教職員間で、生徒指導マニュアルを確認し、相互に情報交換を行って生徒指導に取り組んでいる。毎週生活指導部会を開き情報共有が密に行い、委員会で話した内容を学年会で共有した。生活指導部会や特別支援委員会の報告を活用し対策の検討ができている。	A	
	②　スクールカウンセラーや学校支援チーム（ハーツ）の情報を生活指導部会や特別支援委員会で活用し、対策を検討していく。	スクールカウンセラーとの連携を密に行い、クラスになじみにくい生徒への対策を行っている。ハーツとの連携に関しては、不十分であると考える。	B	
	③　配慮を要する生徒や気になる出来事などの情報共有を、生活指導部会や特別支援委員会で行っていく。	情報共有については、毎週特別支援委員会や生活指導部会を開き、配慮を要する生徒の情報や細かな情報を共有することができた。電子回覧を活用し全教員でも情報共有できている。その生徒に合った学習方法など情報共有を行い、板書など相談することができた。	A	
	④　特別支援委員会が、各事案における家庭との連携方法や生徒対応について方向性を見い出し、共通理解のもと、全教職員で取り組んでいく。	個々の生徒の状況に合わせた指導方法や伝達方法について、特別支援員会を中心に連携することができていた。家庭のことや生徒について話し合い共通理解できていた。特別支援委員会での内容も全教員に周知され共通理解され、養護教諭が連携を強く行っているため、全教職員の共通理解のもと事案対応を進められている。	B	
②	「ボランティア活動に、積極的に参加する」を目標に、幅広く参加できる環境づくりを目指していく。	生徒に周知して参加ができた。生徒会がタブレットのアンケートを活用してアナウンスし、全校に向けて募集を行っていた。どの生徒も参加しやすい環境であった。取組具合は個々の生徒によって異なるが、もっとボランティアがあっても良い。	B	地域とのつながりを大切にしていく。地域への貢献意欲を高める工夫が十分でないので、指導法を考えて実践していく。もう少し主体的に取り組めるとよい。地域ボランティアについては、決まった生徒のみの参加が目立つ。地域活動にとどまらず、長期休みに活動できるものや作品応募など、生徒がチャレンジできるプログラムの情報提供をTeamsなどを使って配信していくことも必要だと思う。市民科で地元に関心をもてるような授業を行っていく。
	①一貫教育の取組として、積極的に地域行事（体験的な活動やボランティア活動など）へ参加させ、社会性（地域への貢献意欲）を向上させていく。	地域ボランティアについては、自主性を重んじ、生徒自ら応募したもののみが参加する形式となっている。地域との連携が多い。教員で担当を割り振り活動した。生徒が地域の人と協力しイベントを盛り上げることができた。ボランティア活動を通して生徒の社会性の向上も期待できるといえる。	B	
	②市民科において、社会貢献を目指した課題解決学習を年間計画の中に設定し、一貫プランに取り組んでいく。	各学年1学期分は、社会貢献を目指した学習指導計画が立てられていた。年間計画の中に設定したが、あまり時間を割くことができなかった。来年度において、キャリア教育を軸とした一貫プランを構築することで、最終的には社会貢献に結び付けた課題解決学習に取り組むことができると予想される。	B	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立富士見台中学校

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標		○自己実現を可能にする生徒の育成 ■重点目標 １　体力の向上 ２　健康教育の充実		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	東京都体力調査において都平均を上回る。	持久走種目が低い。	B	学校としての達成状況を全教員に周知する。体育の授業の中で改善していく。
	①　東京都体力調査の結果を分析し、課題を明確にする。また、ワンミニッツエクササイズやスポーツトライアル等、品川アクティブライフプロジェクトを活用しながら、体力向上に努めていく。	体育の授業でやって頂いている。学校としての達成状況がわからない。スポーツトライアルで重点種目を決めて達成することができた。	B	
②	健康教育（薬育）を充実させ、自己の健康について、全校生徒の意識を高めていく。	7年生を対象に薬育をすることができた。ワンミニッツエクセサイズを実施していないので、継続的な呼びかけはあまり見られなかった。生活習慣が乱れている生徒が少なく、感染症流行時には意識して対策できていた。学校薬剤師を呼び、講演を行っていただいた。講演の感想では、自己の健康について意識が高まったという意見があった。	B	日常の中でも健康の大切さを伝えていく。薬育やがん教育が今後の自身の健康増進のために役立つよう、工夫をして取り組んでいく。
	①　薬育やがん教育などの健康教育を通して、健康増進に努めていく。	7年生を対象に薬育をすることができた。がん教育は3月に実施予定。薬育により、健康増進に努められる環境が整っている。	B	
	②　保健体育科教諭や養護教諭が生徒向けに体力増進や健康生活実践に関する情報提供や授業を行っていく。	7年生を対象に薬育をすることができた。保健室前の掲示や保健委員会からの連絡など、季節に応じた情報提供がされていた。保健委員会の取り組みとして情報提供が行われていた。保健体育の授業や薬育の授業において健康教育を充実させることができている。	B	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立富士見台中学校

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標	○自己実現を可能にする生徒の育成 ■重点目標 1．早期の情報共有と対応 2．組織的対応

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	いじめの未然防止に努める。また、早期発見早期対応にも努める。	いじめ防止に向けた指導計画や研修を通して、全教員が一丸となって取り組むことができた。アンケート結果後早期対応した。日々のデイケンや月1回のいじめDにより早期発見、早期対応できている。自立活動で生活を振り返るなど生徒の変化に気づき情報共有を行った。いじめ防止に関する対応は必要十分であると体感している。いじめに関しては、生徒だけでの環境を作らないようにすることで、未然防止に努めている。	A	日々、生徒の交友関係は変化するので生徒とのコミュニケーションを取り、情報交換しながら組織で対応していく。学級の指導で日常の生活においていじめ防止となる取組を行っている。QUアンケートの結果を生かし要支援の生徒を中心としたケアや指導の工夫を重点的に行った。いじめDアンケートが形式的になり、本来の目的を達成できないことのがないように、実施前の教員によるアンケートに対する姿勢や態度については、毎回伝えることを徹底した方がよい。信頼関係をつくり話せる環境をつくり安心した場を提供できるようにしていく。今後もデイケンやいじめDを活用し早期発見早期対応に努めていく、また、生徒の様子も注意深く観察していきたい。
	①　適宜、いじめ防止等に関する校内研修を行うことにより、それを日常の指導に生かすことができるようにしていく。	参考になる部分もあった。いじめ研修での動画や共有資料を参考に、日々の指導に活かすことができた。教員の対応がチームで行われている。研修を行って、生かせるようにつとめている。校内研修を行うことで、いじめについて意識することができた。校内研修で、事例や指導方針の確認ができた。	A	
	②　いじめ防止に向けた各種調査ツールやスクールカウンセラー、家庭からの情報等を通して、いじめの早期発見に努めるとともに、「いじめゼロ」を目指す環境づくり（嫌がらせのない環境づくり）を行い、発見時においては、いじめ防止対策委員会を通して、すみやかに組織的な対応をしていく。	組織で対応することができた。生活指導部会や学年会での情報共有のみならず、月１回のいじめDアンケートの結果から、日々の生徒の変化を見逃さず、対応することができた。デイケンやいじめDを通して常に生徒の状況を確認することができた。いじめDアンケートを用いて、いじめゼロに向けた環境づくりを徹底している。	B	
	③　未然防止のために、市民科を中心に、各学年に応じたいじめ防止の授業に取り組む。（年間3回以上）	いじめに関する授業を行った。トリプルチェンジや人権、生命にかかわる単元を活用して、話し合いや読み物教材を通していじめ防止の授業を実施することができた。トリプルチェンジを市民科で行い、各学年3回のいじめ防止に向けた授業を行うことができている。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成